

# 寸言

東レ株式会社  
常務取締役  
複合材料事業本部長  
大西 盛行



## ドリームライナーで実現した技術者の「夢」

SJAC並びに会員企業の皆様におかれましては、健やかなる新春をお迎えになりましたことと心よりお慶び申し上げます。

昨年11月1日、待望のボーイング787の世界初定期便就航となるANA651便（東京ー岡山）に搭乗、「787ドリームライナー」の素晴らしさを体感し、炭素繊維複合材料で機体構造重量の50%が出来た787がいよいよ日本の空、世界の空を飛ぶのだと改めて実感いたしました。7月に羽田に初飛来して以降、日本の技術が集約された最新鋭の準国産機として報道され話題となりましたが、まさに日本の航空機産業の力が世の中に再認識された数ヶ月でした。787には、当社の炭素繊維“トレカ”が採用されていますが、“トレカ”を使い一体成形された機体は、軽量化を通じて燃費の向上に貢献するだけでなく、強度や耐腐食性に優れ、機内をより地上に近い気圧や湿度に保つことを可能としました。また、窓も従来機に比べ30%大きく開放感があり、乗客にとってより快適な室内環境を実現しています。

当社は現在、中期経営課題“プロジェクトAP-G2013”に沿って、環境問題解決型の製品事業を拡大していく「グリーンイノベーション」事業を推進していますが、炭素繊維の特性を生かした機体の軽量化と燃費の改善、CO2の大幅削減が期待できる787の本格就航は、当社の複合材料事業にとっても大きなマイルストーンと感じています。

当社は1971年に世界に先駆けて炭素繊維の商業生産を開始し、昨年で40周年を迎えることが出来ました。この節目となる年に、長年の夢でありました、炭素繊維を主要構造材料として使用した「黒い航空機」の就航が行われたことは、大変意義深いものと思います。

航空機における“トレカ”の歴史を振り返りますと、1970年頃に二次構造材として採用された後、1995年就航ボーイング777の尾翼など一次構造材に、高靱性樹脂を組み合わせた“トレカ”プリプレグが採用され、当社の炭素繊維製造・開発のマザー工場である愛媛工場から納入を開始いたしました。1992年には、シアトル郊外タコマ市にToray Composites America, Inc.社を設立、現地生産・供給化を実現し、ボーイング社と複合材料の開発・技術交流を続けてまいりました。787での全面的な“トレカ”採用は、こうした当社の長年にわたる安定した材料供給実績と品質優位性が評価されたものと認識しております。

振り返りますと2003年4月末に、私自身がボーイング社の7E7サプライチェーン担当部長であったボブ・ノーブル氏に呼び出され、「7E7に複合材採用が決まった。材料コストダウンを達成して、プリプレグをこの目標価格で供給して欲しい」と要請を受け、「価格目標は事業性を検討して返事するが、東レは炭素繊維が航空機に全面的に採用されることを夢見て開発を続けてきたので、必ずボーイング社の期待に応える」と約束したのが昨日のこのように思い起こされます。以来、787向け材料メーカーとして、日本、そして世界のパートナー企業の皆様との交流が深まり、一体感を持って仕事をさせて頂いていることに御礼を申し上げます。今後もしっかりと安定的な材料生産・供給を継続し、787生産を支えていくと共に、この経験を生かして、複合材料の開発・提案を通じて日本の航空宇宙産業の更なる発展に貢献出来ればと考えております。今後とも皆様のご支援を頂きますよう宜しくお願い申し上げます。